

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：34523

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26420655

研究課題名(和文) 讃岐国善通寺における伽藍構成の近世的変容過程に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the transformation process of the architectural composition in Zentsuji-temple during the early modern period

研究代表者

山之内 誠 (YAMANOUCHI, Makoto)

神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授

研究者番号：40330493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、弘法大師生誕の地として知られる讃岐国善通寺を対象として、近世における伽藍の整備・発展過程と、その性格の変遷を明らかにすることを目的としている。善通寺伽藍を描いた絵図類や、善通寺文書の調査分析を通して、17世紀から19世紀前期にかけて、西院伽藍に御影堂を中心とした大衆参詣のための空間が段階的に整備された様相を明らかにした。また、安永2年(1773)の開帳の記録から、参詣客を集めるために臨時に設けられた展示空間の特徴を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research is clarifying the developing process of the architectural composition and the transformation of its character in Zentsuji-temple during the early modern period. Through the analysis of some painting materials and ancient documents, I found that the space for popular pilgrimage was developed around Miedo hall in Saiin area step by step from the 17th century to the first half of 19th century. Moreover, based on the analysis of the documents about Kaicho (Exhibition of treasured Buddhist images) in 1773, I revealed the characteristics of special exhibition space for the visitors in the temporary events.

研究分野：日本建築史

キーワード：善通寺 大衆参詣 近世寺院 開帳

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 讃岐国普通寺は、弘法大師生誕の地として古くから朝野の崇敬を集め、近世以降は四国遍路や金毘羅参詣の巡礼地としても親しまれてきた地方中核寺院である。普通寺伽藍の歴史は古代に遡るが、戦国時代の永禄元年(1588)、同寺に駐留した三好實休軍の退却に際して全焼したことが伝えられており、普通寺の近世は、この被災からの復興の歴史であった。近世の普通寺史の既往文献は、基本的にこの永禄の火災で失われた堂舎の復興という文脈で語られているため、個別の建物の沿革についての言及が中心で、伽藍全体の通時的な把握と、その性格の変遷に関する分析が不十分であった。しかしながら、特に本坊がおかれた西院の誕生院(図1)では、17世紀後半から19世紀前半にかけて御影堂を中心とした大衆参詣の空間の形成と発展がみられる。そして、今まであまり言及されてこなかったこの過程こそが、普通寺の近世的変容の本質であり、これは中世以前から続く地方中核寺院が、近世特有の境内空間を獲得していく過程を示す重要な事例と考えられる。このため本研究では、近世の普通寺伽藍、なかでも西院部分の変遷を通時的に把握し、伽藍の性格の変化を明らかにすることにした。

(2) 本研究の意義は、寺院建築史において中世と近世を隔てる本質が何であるかを、地方寺院も視野に入れて考察するための事例を提供できるところにあると考えている。寺院境内や寺院本堂の近世的変容を扱った先行研究には、先学の優れた成果も存在しているが、一部の例外を除けば、既往研究は基本的に江戸をはじめとする大都市の有力寺院を中心としており、強大な幕藩権力と結びついた形で推進された、ある種の特殊事例を対象としていると言える。したがって、より全国的・普遍的な視点から寺院伽藍の近世的特質への理解を深めていくためには、特に地方寺院の事例研究を積み重ねていく必要がある。本研究は、こうした認識のもとに行う事例研究に他ならない。

## 2. 研究の目的

本研究は、普通寺伽藍を題材に、中世以来の地方中核寺院の伽藍がいかにして近世寺院としての空間的性格を獲得し、充実させていったのかを解明することを目的としている。中世寺院の近世的変容を通時的に把握する研究は未だ事例が少なく、とりわけ地方寺院の様相は未知の部分が多いが、本研究では、主として整理が進みつつある普通寺の近世史料や絵図類を手がかりとして、特に西院の御影堂を中心とした大衆参詣のための空間が発生し、発展していく過程を中心に、伽藍全体の建築構成の変遷を解明することを目指した。具体的には、(1)永禄の火災以後における伽藍諸堂舎の再建・修造の歴史を整理し、伽藍全体の復興プロセスを明らかにすること、(2)御影堂の計画・発展過程および

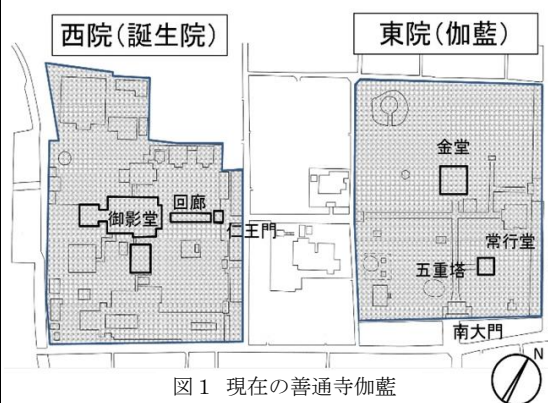


図1 現在の普通寺伽藍

西院誕生院の建築配置の変遷を明らかにし、大衆参詣の空間としての成長過程とその社会的背景を考察すること、(3)弘法大師御嘉辰や御開帳の機会における臨時の舗設を分析し、大衆参詣に対応した伽藍の使用方法を考察すること、(4)上記の考察を通じ、近世寺院としての普通寺伽藍の特質を明らかにすることを、目標とするものである。

## 3. 研究の方法

普通寺には、近世の寺観を描いた絵図・指図類が、管見の及ぶ限りでも江戸前期の伽藍計画図1点、中期の絵図および地図3点、後期の名所図会類等5点の計9点存在する。

- (1) 『普通寺西院内之図』(以下、『西院図』と略す)、寛永11年(1634)
  - (2) 『四国徧礼霊場記』元禄2年(1689)刊行
  - (3) 『讃岐国多度郡屏風之浦五岳山普通寺官界地図』、宝暦5年(1755)模写
  - (4) 『讃岐国多度郡屏風之浦五岳山普通寺管内地図』、宝暦5年模写
  - (5) 『四国遍礼名所図会』、寛政12年(1800)成立
  - (6) 『讃州屏風浦五岳山普通寺略図』、文政年間(1818-30)頃成立
  - (7) 『中国名所図会』、文政末頃成立
  - (8) 『讃岐国名勝図会 草稿』、天保11年—弘化2年(1840-45)頃成立
  - (9) 『金毘羅参詣名所図会』、弘化4年刊行
- 本研究は、普通寺伽藍の空間的イメージを具体的に捉えることに主眼をおくため、これらの絵図・指図類の比較分析を軸に、通時的な伽藍の変遷を試みた。

また、これらに加え、普通寺蔵の近世史料を適宜参照した。普通寺には数万点に及ぶ近世の文書・記録類が所蔵され、その中には、50年ごとに行われた弘法大師御遠忌(御忌)や御嘉辰に伴う伽藍整備の記録をはじめ、日々の寺務を記した日用録、また度々行われた開帳時の堂舎の使用方法的記録等、近世の伽藍構成を窺い知ることが可能な多くの資料が含まれている。本研究では、これらの寺蔵資料によって絵図・指図類の情報を補いながら分析・考察を進めた。

## 4. 研究成果

- (1) 本研究では、近世の普通寺の伽藍構成の

変遷を、17世紀、18世紀前期、18世紀後期、及び19世紀前半の四期に分けて分析し、御影堂を中心とした参詣空間が誕生して、充実・発展していく様相を、通時的に考察した。ここではその概要を時系列に記す。

①17世紀の西院伽藍整備とその意義

『西院図』と『四国徧礼霊場記』(図2)の描写を主な手がかりに、17世紀の善通寺西院伽藍の変化を追った結果、以下のことが判明した。

- a. 『西院図』の位置づけと記載内容の意味  
『西院図』は、生駒氏の伽藍寄進の実績と援助計画を伝えており、弘法大師800年御忌の当日に善通寺へ奉納されたものと考えられる。このため、本図の製作目的は、為政者の立場から、弘法大師信仰の篤さと善通寺を庇護する姿勢を示すことにあったと考えられる。
- b. 「新御影堂」と延宝再建御影堂との関係  
『西院図』における「新御影堂」は、朱書部分を残してほぼ完成していたと考えられるため、延宝年間に再建された御影堂とは別物と考えられる。したがって、御影堂は、17世紀の間に2度の建て替えを経たと考えられる。
- c. 御影堂の発展過程  
御影堂は17世紀の間に段階的に礼拝空間を充実させていった。すなわち、方三間(「古御影堂」)から方五間(「新御影堂」)、方六間(延宝再建御影堂)へと順次規模が拡大され、17世紀末までに礼堂の背後に奥殿を持つ複合仏堂へと発展した。
- d. 境内空間の整備過程  
客殿と護摩堂の移築は寛永11年の『西院図』段階ですでに企画されていたが、貞享年間までに先に護摩堂が移築され、遅れて客殿が元禄4年までに移築される順序を辿り、御影堂・護摩堂・客殿が並立する伽藍構成が確立した。

なかでもc及びdは、古代・中世を生き抜いてきた古刹の善通寺が、大衆参詣に対応した近世寺院へと生まれ変わっていく過程を如実に示していると考えられ、寺院伽藍の近世化の一事例として、まことに興味深い。

②18世紀前期の伽藍整備とその意義

主として『讃岐国多度郡屏風之浦五岳山善通寺官界地図』(図3)および『讃岐国多度



図2 『四国徧礼霊場記』に描かれた17世紀後期の善通寺伽藍 (内閣文庫蔵本)

郡屏風之浦五岳山善通寺管内地図』(共に宝暦5年模写)の描写と、17世紀後期の伽藍を描いた『四国徧礼霊場記』の比較を行った。その結果、善通寺においては、永禄の火災以降、東院の全山的な機能の一部が一時的に西院や観智院に退避させられ、そのことが移転先を信仰の場として発達させた可能性があることが窺えた。そして復興段階においては、移転先で信仰上欠くべからざる要素となったものがそのまま残され、それ以外が東院へと復されたと推測でき、このような過程を経て、18世紀前半までに西院の基本的な性格が固まったと考えられた。

③18世紀後期の伽藍整備とその意義

『四国徧礼名所図会』(寛政12年)の描写と天明4年(1784)に行われた弘法大師950年御忌の記録を主な手がかりとして分析した結果、この時期には、御影堂の北側にも信仰対象となる仏堂(十王堂)と参詣客の接待施設(茶堂)が設けられるようになり、参詣空間としてより充実してきたことが窺えた。

④19世紀前半の伽藍整備とその意義

文政年間に描かれた『讃州屏風浦五岳山善通寺略図』と、その情報を援用したと考えられる『中国名所図会』、『讃岐国名勝図会 草稿』、及び『金比羅参詣名所図会』の4点の絵図を手がかりに境内の変遷を考察した。全体的に見ると、18世紀までに形成された御影堂を中心とする西院の参詣空間に対し、19世紀前期に西院北側に親鸞堂が新たな信仰対象として加わっており、西院伽藍全体として一つの完成形に到達したことが指摘できる。すなわち、二王門から回廊・拝所を経て御影堂に至る空間を中心に据え、北側には十王堂、親鸞堂、さらには接待所としての茶堂が並ぶ参詣空間が完成し、回廊南側には、18世紀中後期に整備された客殿、庫裏等をはじめとする本坊の機能がおかれ、この時期に近代まで続く伽藍構成が完成した。一方、東院では南大門や鼓楼の計画が途中で頓挫したらしいことが窺えたが、おそらく天保11年に伽藍の象徴たる五重塔を焼失し、その復興が最優先されたことが影響したものと思われる。

以上では、絵図類をたよりに近世における善通寺伽藍の変遷を時系列に考察したが、最

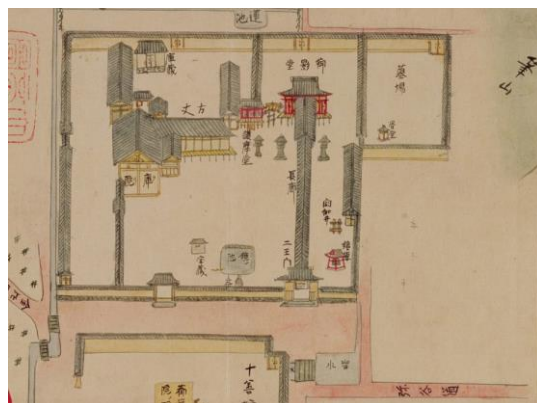


図3 『讃岐国多度郡屏風之浦五岳山善通寺官界地図』に描かれた17世紀後期の西院伽藍 (内閣文庫蔵本)

後に御影堂と西院伽藍の性格の変化を通観しておきたい。

#### ⑤御影堂の建築と位置づけの変化

16世紀の天正年間に生駒親正が西院に建立した古御影堂は三間四方の小規模なものであり、おそらく全山的な参詣空間の中心となるべく計画されたものではなかった。しかし、『西院図』にみる寛永期の計画では、二王門の正面にあたる西院の中心に五間堂の本格的な仏堂として計画されており、明確に西院における大師信仰の核となる象徴的存在と位置付けられたことが窺える。この段階の御影堂は、未だ奥殿と礼堂から成る構成ではなく、一堂で完結した形式で計画されていたが、延宝再建の御影堂は、六間四方の礼堂と三間四方の奥殿とからなる複合仏堂となり、礼拝空間がより拡充されたものであった。その後18世紀には、享保19年(1734)の900年御忌に合わせて仁王門から御影堂までの間に回廊が設けられ、さらに御影堂礼堂との接続部に回廊を拡張した拝所までが設けられるなど、大衆参詣に対応した整備が進んだ。また19世紀にはいと、天保5年1000年忌の機会に、御影堂礼堂が建て替えられ、九間四方にまで拡張されている。

以上のように、御影堂には50年ごとの御忌の機会に、一貫して礼拝空間を拡大・充実させる改変が加えられたことがわかる。このたび重なる改変は、御影堂という存在が、大師の御影を安置する一堂から、善通寺伽藍全体の信仰の中心へと移り変わっていく過程を映し出していると考えられる。

#### ⑥西院の性格の変化と充実

『西院図』以前の西院の様子がわかる史料はほとんど存在しないが、おそらく16世紀の「古御影堂」の段階までは、誕生院は善通寺権別当の住む本坊としての性格が強く、大衆参詣に対応した伽藍整備はあまり意図されていなかったのではないかと想像する。しかし、寛永11年の大師800年御忌が契機となり、17世紀後期までに御影堂を信仰の中心とする参詣空間が誕生した。御影堂自体の変化については上述のとおりだが、18世紀以降、西院内の諸堂も整備された。享保の900年御忌に際し御影堂前に回廊が新設されたのをはじめ、18世紀後半には天明の950年御忌などを機に、客殿まわりや書院、長屋、邀月亭などの本坊機能の整備が進み、また歓喜天を祀る堂も設けられた。西院北側の参詣空間としての整備も18世紀後期以降行われ、茶堂、十王堂に続き、19世紀前期には親鸞堂という新たな信仰対象も加わった。このように、御影堂だけでなく、伽藍全体が参詣客を集める信仰の場として充実していった過程が読み取れる。

#### (2)安永2年の御嘉辰における開帳場の特徴

本研究においては、善通寺における日常・非日常の両側面を考察することを通して、近世善通寺の参詣空間の実態をうかがいながら

表1 近世の善通寺における開帳一覧

開帳種別	開帳時期	実施目的	善通寺文書 根拠資料*
1 出開帳(江戸)	1696(元禄9)	金堂再興	1-2_7
2 出開帳(播州網干・備前岡山)	1700(元禄13)	金堂再興	13_22
3 出開帳(高松)	1701(元禄14)	金堂再興	13_22
4 出開帳(大坂)	1740(元文5)		13_14,15
5 居開帳	1755(宝暦5)		13_19
6 居開帳	1762(宝暦12)	請雨	2-4_53
7 居開帳	1762(宝暦12)	五重塔再興	13_20-1
8 居開帳	1763(宝暦13)	請雨	2-4_171
9 居開帳	1766(明和3)	請雨	2-4_96,97
10 居開帳	1770(明和7)	請雨	2-4_1
11 出開帳(大坂)	1771(明和8)		13_21
12 居開帳	1773(安永2)	御嘉辰	13_22
13 居開帳	1797(寛政9)		13_25,26
14 居開帳	1818(文化15)	伽藍修造	13_28
15 居開帳	1841(天保12)		13_1~7
16 居開帳	1863(文久3)		13_29

\*善通寺文書の整理番号(箱数\_号数)を示す

せることを意図している。このため前節に記した日常の伽藍構成の変遷に加え、非日常の場面において、大衆参詣のための仮設空間がどのように構成されていたのかを解明すべく、善通寺において度々行われていた開帳(表1)の中から、安永2年(1773)の御嘉辰の際の開帳をとりあげ、この時の記録(「御戸開一卷」、善通寺文書13箱22号)をたよりに開帳に伴う臨時の設営の分析を行った。その検討結果の概要は、以下の通りである。

#### ① 目的に応じた開帳場の展示方式

安永2年の開帳場では、展示方式が会場ごとに異なっていた。金堂では、太鼓張り障子を多用して参詣動線に沿って空間を細分化し、進行中の五重塔再建事業に関わる四仏や、寺院の由緒に深くかかわる重宝を並列的に配置した(図4)のに対し、御影堂及び護摩堂では、仮囲いの柱間装置はほとんど用いず、常設の空間に簡単な結界竹などを置く程度の設営とし、各堂の主尊(稚児大師像、瞬目大師御影、不動尊)を主役に据えた弘法大師信仰の場として開帳場が演出された。この空間的相違は、それぞれの場が担った役割の相違に対応していると考えられる。すなわち、日常から善通寺における弘法大師信仰の核であった西院では、御影堂礼堂での稚児御影像の荘厳さへ行えば、開帳時に大掛かりな柱間装置の操作等を要さずに弘法大師信仰の場としての役割を果たせたものと推察できる。それに対し、全山の本尊を祀る東院金堂は、当時の全山的な要請から五重塔再建に向けた勧進の場としての役割を担ったため、参詣者に対し、寺の由緒や権威を印象付けつつ、五重塔再建に向けた寄進行動を促す狙いの展示空間が企画されたと推測できる。このため金堂に集められた展示物の間には信仰上の脈絡が希薄であり、必然的に並列的な配置計画が採用されたと考えられる。

#### ② 既存部に配慮した設営方法

一方、東院と西院の開帳場に共通する特徴

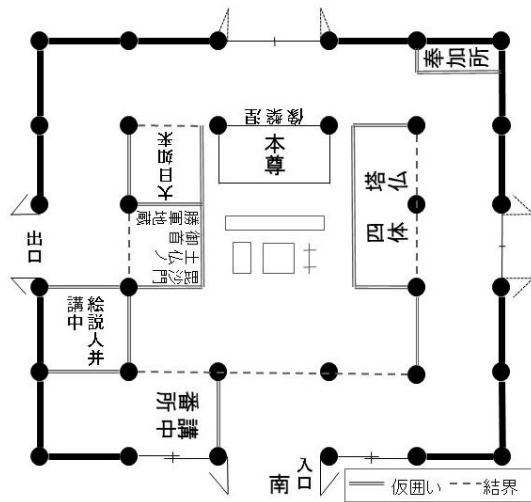


図4 金堂仮設間仕切説明図

としては、実質的に数日間で終わる簡易な設営であったことに加え、建物の既存部に疵をつけぬことを原則とし、具体的な仕様を含む設営の指針が設けられた点があげられる。実際、現存する金堂と旧御影堂礼堂（現・常行堂）には仮囲い等の痕跡が全く残されていないが、このような既存部に配慮した設営方法が、原状復帰を完全かつ容易にした側面も見逃せない。

安永度の開帳場では、賑やかな参詣空間が瞬く間に現れ、やがて跡形も無く消し去られたが、こうした非日常性の創出は、上述の展示方式や、設営方法の特徴に支えられていたといえる。

### (3) まとめ

本研究では、永禄の火災からの復興史という従来の近世善通寺史の文脈だけでは見えてこない、御影堂を中心とする西院の発展過程を概観することができた。近世の善通寺は、金堂や五重塔の再興に奔走する傍らで、西院の御影堂を中心とした参詣空間を、御忌の機会などを通じて確実に発展させてきたと言える。西院では近代以降も多く堂舎が建て替えられ、特に御影堂北側では建物配置の変更が多く見られるが、御影堂を中心におき、北に参詣客のための空間、南に本坊機能を配置する空間構成自体は、現在も変わっていない。つまり、19世紀前半に完成をみた上述の空間構成が、今日の西院における伽藍配置の下敷きになっているのである。

そして開帳という非日常の機会には、目的に応じて多様な展示方式を採用した参詣空間が賑やかに演出され、しかもそれらが原状回復に注意深く配慮して行われていたことも明らかになった。こうした非日常の伽藍の姿も、大衆参詣の場として庶民と寺院を繋ぐ重要なものであるが、催事後の原状回復により跡形もなく消し去られてしまうため、その一端を明らかにできたことも、本研究の成果の一つと言えよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

山之内誠、17世紀の讃岐国善通寺における西院伽藍の変遷について、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学 2015』、査読有、WEB版、2015年、<http://id.nii.ac.jp/1100/00000136/>

〔図書〕(計2件)

山之内誠、近世讃岐国善通寺の開帳と臨時の設営について、(藤井恵介先生献呈論文集編集委員会編、建築の歴史・様式・社会、中央公論美術出版、2018年)、pp. 233-242、査読有

山之内誠、神戸芸術工科大学山之内研究室、讃岐国善通寺における伽藍構成の近世的変容過程に関する研究(平成26-29年度科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書)、2018年、102頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山之内 誠 (YAMANOUCHI Makoto)

神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授

研究者番号：40330493